



筑紫女学園大学リポジット

古代西アジアの土器とロビンソン・クルーソーのうつわ：『絶世奇談』に読む「新石器革命」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/255

古代西アジアの土器と ロビンソン・クルーソーのうつわ — 『絶世奇談』に読む「新石器革命」 —

大 津 忠 彦

Ancient Pottery of the Western Asia and the Vessels
of Robinson Crusoe in his Island of Despair

Tadahiko OHTSU

はじめに

アスファルトやコンクリートですっかり埋め尽くされてしまった観のある大都市の街中ではまず叶わないだろうけれど、まだ土くれの豊かなところでは、とくに雨上がりの後など、道端に茶碗のかけらの一片や二片は必ずや眼にすることができる。意識して捜し求めると、たとえば、粘土製の粗雑な素焼きのうつわ（土器）が、石製の鏃や骨片をも混じえて多数散布している箇所に出遭わすこともある。そこは「遺物散布地」という遺跡である。

西アジアでも似たような遺跡状況がみられる。ただし、そこでの古代人の生活場処は我が国の場合よりもはるかにもっと地域を限定して継続されていたらしく、ひとつの古代遺跡が一万年近い期間の生活跡を濃密に包含していることも珍しくはない。たとえばイラン高原で「タッペ」、メソポタミアで「テル」、アナトリア高原で「ホユック」等と呼称する丘状遺跡（遺丘）は、まさに限定して長期継続した生活活動の所産、すなわち古代人が日々積み重ね続けた「生活廃棄物」層が山を成したものである。曰く、「都市や町邑は、前代のセトルメントの廃址に乗って構築されるので、考古学的なマウンドはレイヤーケーキ状の堆積土層をもって、その規模が増大 (Rosen 1986)」したのである。計算によれば、遺丘の形成速度は100年間で18インチ（約46cm）ともいわれる (Lloyd 1963)。このような遺跡をたしかに遺跡であると考古学的に認定させる指標材料たる典型遺物こそがまさに土器の破片、西アジアにおいては、とりわけ地域や時代の特徴を示す彩文土器の破片であろう。遺跡を訪れた者の眼に否応なくも土器が映るのは、遺物として最も多量に散布するからばかりでなく、なかでも彩文土器の芸術的ともいえる赤や黄や緑や白や黒の彩画が、乾ききった土の上ではよく目立つからである。

古代遺跡の指標たる散布土器であるが、発掘調査によって得られる考古資料のうちでも土器の占める割合はたしかに一等最大である。なるほど土器の焼成粘土という材質は再利用されることがな

く、また、木など有機質のものや金属に比して、朽ちることなくほとんど永久に残存するからという理由はある。しかし、土器を遺跡に数多く残存せしめたのは、やはりそれだけ大量に古代人が生産し続けたからであり、このことは原材料の経済性、利便性にまず起因すると考えねばならないであろう。

先駆的考古学者チャイルド (G. Childe, 英, 1892~1957年) が、「人間が化学変化を自覚して利用した最初のものである (ねず訳 1951)」として、人類史上におけるその多角的影響を指摘した土器は、それではいったいどのように出現してきたのか。「西アジアでは土器の出現によって生活様式が大きく変わってしまったような変化は認められない (大津他 1997)」ものの、今日なお究明の途上にあるこの重要課題をいくつかの西アジア考古学研究成果に往々考えなおす時、このたびの拙稿表題の件がどうしても疑問になる。ここにあって、覚書の試論としてその梗概を著し、御批判御教示を仰ぐ好機としたい。まずはこれまでの西アジア考古学調査成果より、関連する事例のいくつかをあらためて見てみよう。

西アジアにおける土器発生前後期に関する考古学調査成果より

1900年代半ば、シリア、パレスティナから北メソポタミアおよびイラン高原西方部に亘る地域、すなわち、東洋学者ブレステッド (J. Breasted, 米, 1865~1935年) が命名したといわれるかの「豊穡なる三日月地帯 (fertile crescent)」は集中的な考古学調査の対象地となった。たとえばシカゴ大学チームの「イラク・ジャルモ プロジェクト」(1947~55年) や「イラン先史時代プロジェクト」(1959~60年) などである。このうち後者はシカゴ大学東洋文化研究所のブレイドウッド (R. Braidwood) やハーバード大学ピーボディ博物館のハウ (B. Howe) らを中心とするアメリカ隊の調査活動であり、1959年9月から翌年6月までの期間中に、シャーハーバード、ケルマーンシャー周辺域を踏査し、およそ10万年前から5千年前までにわたる洞窟、遺物散布地、タッペなど200地点以上の遺跡の位置を地図上に明記した。これは第二次世界大戦直後の1947年から1955年の期間中に、隣国イラクのクルディスタンで実行された「イラク・ジャルモ プロジェクト」(前記) のイラン版であり、構成メンバーも基本的にはおなじであった。これらのプロジェクトには、イラク/イラン国境線がその内に走るザクロス山脈斜面地帯こそ、今から1万年くらい前に西アジア地域で最初に実質的な食糧生産活動がはじまり、人々は村落農耕共同体を営むようになったところである、ということを実証しようとする研究目的があった (Braidwood 1958, 1961, 1968; Braidwood et al., 1961)。期間中、「イラン先史時代プロジェクト」は遺跡のほとんどを試験的に発掘したばかりでなく、ケルマーンシャー近くのテベ・アシアブ、テベ・サラブ遺跡などを有望な遺跡として選定し発掘調査した。そしてこれらの遺跡では、土器が出現する前後期における粘土活用の初原的事例を示す考古資料を明らかにすることができた。

テベ・アシアブ遺跡はケルマーンシャーの東方6 km、標高1,400mに位置する小規模の遺丘である。遺構として検出された浅い堅穴は、半地下式の季節的住居 (野营地) の跡であろうと考えられ

ている。石製の磨臼^{すりうす}、利器、ビーズ、ペンダント、腕輪などの遺物と共に、220余個にのぼる意味不詳の粘土製品が出土した。いずれも1～2cmと小さく、かたちは球、円盤、円錐、楕円、三角形など、粘土をいじっている時自然にできあがる形のものばかりである。マサチューセッツ工科大学での分析結果によると、これらは摂氏600～700度で焼成されたらしく、火の当り具合の違いが、赤色、灰色など製品の色の違いとなって現れている。ちなみに、摂氏600～700度という焼成温度は、我が国の縄文式土器、弥生式土器の焼成温度とほぼ同じである。また、数点出土の「ヴィーナス」像など粘土製小像らしいと思われるものの破片があった。しかしこれらは、いずれも見方によって判断の分れる形状である。土器の出土報告例はない。

出土獣骨試料の分析結果によると、当時すでにヤギが飼育されていたらしく、石製磨臼など他の出土遺物と合せ考慮すると、ここに初期段階の農耕・牧畜社会の一面が推測される。テベ・アシアブ遺跡の帰属年代に関しては、「放射性炭素14年代測定法」による測定値として紀元前7,100～6,750年との発表数値がある。

もう一つのテベ・サラブ遺跡もまた、テベ・アシアブ遺跡とはそれほど隔たりのないところ、ケルマンシャーの東方7km、標高1,300mに位置する。これも高さの低い小規模な遺丘である。発掘された小屋程度の竪穴住居は、先述のテベ・アシアブ遺跡の場合とは異なり、年間を通じて常に営まれたと考えられている。ここでもヤギ、ヒツジがすでに飼育されていたことを出土獣骨試料の分析結果は示している。テベ・サラブ遺跡の「放射性炭素14年代測定法」による年代値は紀元前6,000～5,655年で、これはテベ・アシアブ遺跡よりやや年代が下る。

粘土製品のうちには、テベ・アシアブ遺跡出土相当品よりずっと形状の具体的な動物小像としてイヌやイノシシなどを表現したものや三角形、球形、円錐形などの粘土小片と共に、「サラブのヴィーナス」と呼ばれる土製品があった。その豊かな胸乳、臀部の表現などからこれは明らかに女性の座像である。首が長いことは特徴のひとつであり、いまひとつ形状が不祥であったテベ・アシアブ遺跡や後述するギャンジ・ダッレ・テベ遺跡 (Smith 1971) のうちE層からの出土例も、きっと同じ系譜と考えられる。

土器については考古学的分類上「サラブ様式」と呼ばれる「彩文土器」が相伴した。これは、かなり発達した段階の土器であり、同じザクロス山岳地帯で最古の土器事例のひとつが発掘されたテベ・グーラーン遺跡（ここでは8mの堆積層中に連続する18枚の生活文化層が検出された）の上層位からも出土している。なお、「サラブ様式」土器を出土したテベ・グーラーン遺跡堆積層のひとつの「放射性炭素14年代測定法」による年代値は紀元前5,810年と発表されている。これは、テベ・サラブ遺跡の紀元前6,000～5,655年という測定値とうまく整合する。

発生期の土器について考察する際、考慮すべき遺跡のひとつとして、ギャンジ・ダッレ・テベ遺跡（「室の谷の丘」の意、イラン）がある。1965年の夏期、モントリオール大学のスミス (P. Smith) やロイヤル・オンタリオ博物館のヤング (T. Young) らによって組織されたカナダ調査隊は、ルリスターンからクルディスターン、アーゼルバイジャンを踏査し、その結果これを発掘調査対象の有望な遺跡のひとつとして選定することができた。遺跡はアケメネス朝ペルシア王ダレイオスI世

の磨崖碑で知られるビーソトゥーンの南約14km、標高1,400m余のクルディスタン山中にある。直径約40m、高さ8mのこの遺跡の丘が1965年に注目されたのは、遺跡地表面に、アケメネス期、イスラーム期の土器、陶器の散布はあるものの、この種の遺跡では普遍的に見ることのできる土器が地表にはなく、かわって多量の石製品が散布していたからであった。小規模のテペで土器がなく、多量の石器の存在となると、「新石器時代」がそこに想起されるのである。

はたして、1967, 69, 71, 74年の四シーズンにわたるテペの発掘調査は、ギャンジ・ダッレ・テペ遺跡が極めて古拙な、「発生期の土器」とでもいうべきものを伴う新石器時代の遺跡であることを明らかにした。発掘者スミスはテペの堆積層を5つに大別している。これらのうち特に注目しなければならないのは最下、従って最も古いとみなされるE層と、その上のD層からの成果であろう。

E層は地山直上に、厚さ1m余堆積した最古層であった。発掘の結果、地山に掘り込まれた少なくとも30基を数える丸い窪地があった。しかしながら直径80~170cm、深さ50cm余のこれらの穴の用途は明らかではない。内側に焼けた丸石や灰の詰った例もあった。ギャンジ・ダッレ・テペ遺跡において遺構らしきものはこれだけで、火利用の跡やいくつかの石器、それに飼育されていたらしいヤギの骨の発見は、古代人の生活がここで営まれたことを物語ってはいるものの、かれらの構造的な家屋の痕跡はなく、したがってテント生活程度であったろうと考えられる。

点文を施した簡素な土器の破片が一点出土したとの簡単な報告もあるけれど、これは正しく土器と呼べるか否か疑問があり、詳細はわからない。そのほか粘土製の小さな「ヴィーナス」像、動物像が数点発見されている。

ギャンジ・ダッレ・テペ遺跡の帰属年代については、E層で採集された一片の木炭試料を学習院大学において放射性炭素14年代測定した結果、紀元前8,450±150年であった。放射性炭素14年代測定法によるギャンジ・ダッレ・テペ遺跡E層の年代値については、実はスミソニアン研究所の年代測定値もあり、こちらの測定値4件は、学習院大学の測定値とはかなりの違いがあって、紀元前6,500年頃を示している。この点について遺跡発掘者スミスは、ザクロス地域における考古学的様相に照らし合せてみて、紀元前8,450±150年という年代値のほうが妥当であると判断している。研究者のあいだでは、僅か一点の測定値からだけではどうも、という慎重論や、放射性炭素14年代測定法自体を、その拠って立つ仮説に対する疑問から否定的にとらえるむきもたしかにある。

続くD層の時期になると泥煉瓦を利用し、木の柱、梁を有していたらしい建物が出現する。煉瓦といっても今日のものとは随分異なり、断面形が一面は平らで他面は盛り上がり、長さも1mと大きい。建物のいくつかの部屋には、壁に作り付けの粘土製容器や、運搬可能な大型貯蔵容器があったが、これらは天日で乾燥させて造られていたらしいものが、火災を被ったために、土器の様に変質して残ったとも考えられている。E層同様、多くの粘土製動物像が発見された。放射性炭素14年代測定法はD層を紀元前7,200年頃と年代付けている。

ところで、未焼成粘土製容器の考古学的出土事例はギャンジ・ダッレ・テペ遺跡以外にイエリコ遺跡（イスラエル）やジャルモ遺跡（イラク）における、床面へ作りつけの容器として報告があり、体系的な土器造りが始まる以前に、粘土が焼かれることなく、成形されただけのままで容器として

活用されていた段階があったことがわかる。

一連の調査研究成果によれば、「豊穰なる三日月地帯」には農耕、牧畜の原初的な様相を示す遺跡が多数分布する。それらの発掘資・試料は自生する野生のオオムギ、コムギが天水利用の乾地農耕作物、すなわち保存に適した穀物の栽培種へと、また野生のヒツジ、ヤギが次第に馴化されて家畜となってゆく過程の一端を物語っていた。

農耕、牧畜の進展により、それまでの狩猟、採集のみに依る社会とは大変な違いが見られるようになる。今から一万年ほど前に興った獲得経済から生産経済への移行というこの一大変革をかつてチャイルドは「新石器革命」と捉え、その後の古代文明の大きな基とみなした：「歴史に最大の変革をもたらした生産経済は中近東で始まり、これを基盤とする新しい文化は、ヨーロッパ、アジアの諸方へと波及し、各地に生産経済に基づく新しい文化を形成した (Childe 1927)」。ただし、初期的段階の「農耕・牧畜」がそれまでの「採集・狩猟」にすっかり取ってかわったわけではなく、また、定住性が飛躍的に進んだわけではなかったようであるが、土器や土器に似た同じく粘土製の容器の考古学的出現状況を、農耕の開始、進捗の様子と関連させ得るところがあるように考えられる。すなわち、土器を古代経済・社会の発達状況を物語る指標のひとつとみなすことができるわけである。土器は農耕・牧畜がかなりの程度発達した段階での産物であった、とするのが西アジア考古学からの知見なのである。もっとも、「豊穰なる三日月地帯」が自然環境的には、深刻な風土病や獐猛な動物の危険性が比較的少ない地域であったことも、これを可能ならしめた要因であったであろう。

ロビンソン・クルーソーの土器作り

① 土器所有以前

1900年代半ば以降の考古学調査研究成果を通して判明した、西アジアの「豊穰なる三日月地帯」における土器発生期の様相は概ね前記の如くであるが、考古学の調査研究から再現されるこのような原始農耕開始期の状況を、とりわけ土器が初めて生み出されそして使用されてゆく段階の様子、初期翻訳書では『絶世奇談』とも表題された18世紀初めの英文学作品「ロビンソン・クルーソー漂流記」中に相対応して処々見出し得ることは興味深い。近代小説の先駆者とも評される作家デフォー (D. Defoe, 英, 1660?~1731年) のこの小説 *The life and strange surprising adventure of Robinson Crusoe* (原題：ロビンソン・クルーソーの生涯と奇しくも驚くべき冒険, 1719年初版) は、周知のごとく、絶海の孤島に漂着した主人公 (作品中では1632年生まれとなっている) が、過酷な条件、制約のもと、幾多の苦難を乗り越えながら、28年間の自給自足の生活を創造的に営み、遂には救出されるという感動の冒険譚である。今、この物語を考古学的に、とりわけ「新石器革命」と土器発生期の視点から読み直してみたい。なお、文中「」で引用した邦文は、平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー』(岩波文庫版, 上・下巻, 1971年第1刷発行, 1989年第22刷発行) からのものであり、下線を施した部分については、特に関連する考古学用語として、適宜「ペンギン・クラシック」の

The life and adventures of Robinson Crusoe (reprint 版, 1988年)を参照し、該当部分を [] 内に明示した。

物語によれば、イギリス中流家庭に生まれ育ったロビンソンは長ずるに及んで外国行の夢止みがたく、1651年9月1日ついに家出、船乗りとなった。ギニア航路の船に乗り、「誠実な船長のおかげで (上巻, p.30)」, 船乗りに必要な諸事を習得すると共に、後の運命的自活をきっと支えるに資したと思われる多様な生活体験を経た。たとえばライオンの獣皮剥ぎ (上巻, p.45) や、ブラジル上陸後の農園経営法や製糖法ほか煙草、甘藷栽培 (上巻, pp.30-54) などであるが、考古学上とくに注目したいのは、これ以前、すでにロビンソンがその子供期に籠作りを見よう見真似で覚えていたということである：

「私がまだ子供のころ、私たち一家が住んでいた町の籠屋の店先につっ立って職人たちが籠をつくるのを夢中になってみていたことが、今になってひどく役にたつことになった。(中略) けっこう、籠のつくり方を覚えこんでしまった (上巻, p.147)」。

この体得した技が窮地のわが身を救うこととなるのである。

ロビンソンが絶海の孤島に漂着 (1659年9月30日) 後、まずはじめにやらねばならなかったことは、生きるための生活必需品を確保することであり、ために彼は、難破船中の積荷は言うに及ばず、マスト、帆まで、可能なかぎりありとあらゆるものを島へ運び入れた。当座の食料としてパン、チーズ、乾燥山羊肉、砂糖、それに酒などがこうして入手されたばかりでなく、幸いにも島には多くの野鳥や、その発見を「小躍して喜んだ (上巻, p.98)」ほどのヤギが棲息していたので、これらを獲得し、その獣脂をあかり用の燃料として活用するようになる。

やがて「心の動揺も静まり、家の道具や住居の問題もかたづいた (上巻, p.97)」, すなわち1ヶ月半ほど経過した頃、「もっと設備を便利にするために、広さをひろげようと、テントのうしろの岩壁を掘る仕事 (上巻, p.102)」に挑んだ時、どうしても必要なもののひとつが籠であった。はからずも、以前みずから拵えたあずまや用の支柱が根付き、これより切り取った枝を材料にして籠作りに成功し、必要を満たすことができた：

「切った枝は垣のなかで乾かし、(中略) なるべくたくさんの籠をせっせと編んだわけであるが、土を運ぶための籠も編んだし、必要に応じていろんなものを運んだり入れたりする籠も編んだ。(中略) そのうちにはいつも籠は手もとから離さないようにした。籠が古くてだめになるとつきつきとつくっていったが、なかでも、穀物がいくらかでも収穫できる日にそなえて、それをいれる袋のかわりに丈夫で深い籠をいくつもつくった (上巻, p.148)」。

1661年のことであった。ロビンソンはうつわの必需を、まずは「籠」で充たしたのであった。

イラン考古学の知見によれば、最初期の彩文土器、たとえばシアルク I 期（紀元前5,000年頃）の事例のひとつで、土器外面に描かれた数条の平行横線と中を塗りつぶした三角形から構成された文様の由来を、シアルク遺跡調査報告者ギルシュマンは「編み籠」とみなしている (Ghirshman 1938, 39)。すなわち、土器が用いられる以前に、どのような器物が、土器の果たす役割を担っていたかについてその示唆を与える一例とみなしたわけである。土器文様意匠の出自のひとつが、このような「器物模倣」にあるとする説は、また、石製容器における「石目」や皮袋を模した形の容器などの場合と同様である。

さて、「籠」問題を解消したロビンソンがつぎに「なんとかかたづけてやろうと意気こんだ（上巻, p. 148）」ふたつの難事のうちのひとつが、液体をいれる容器のことであった：

「ものを煮る鍋さえもなかった。あるものは私が船から辛うじてもちだした一個の湯わかしくらいなもので、それもあまり大きすぎて、たとえばスープを作るとか肉を煮たりするのにはむかなかった（上巻, p. 148）」。

したがってそのころの食事メニューはずいぶんと限られたものであり、「私は食事の献立を次のように定めた。朝食には乾葡萄を一房、昼の正餐には山羊か亀の肉のあぶったもの。残念ながら容器がないのでゆでたり煮たりすることはできなかった。そして夕食には亀の卵を二、三個（上巻, p. 142）」という具合であった。

しかし、この容器についての不便解消に関連して、ロビンソンはそれまでに、将来的展開に結びつく創意的工夫を漂着後の比較的早い段階にすでに経験済みであった。じつは照明を確保する必要からであった：

「私は蠟燭のことでも途方にくれた。（中略）アフリカで苦勞していたころ、蜜蠟の塊から蠟燭を作ったことを思い出したが、そんなものもち合せは今はなかった。ただ一つの道は、山羊を殺したときにその獣脂をとっておき、いっぽう太陽の光にあててやいた土製の小皿 [a little dish made of clay, which I baked in the sun] にそれをいれ、縄用の麻のくずで作ったしんを浸してランプをつくることであった。蠟燭の光のように明るく落着いたものではなかったけれども、とにかくこれで私は光を自分のものにすることができた（上巻, p. 108）」。

ここに土製容器製作の第一段階を見ることができよう。

このことから2年ほど経った頃、土製容器製作についてさらに新たな進展があった。すなわち、大型の未焼成粘土製容器製作段階を経て、ついに焼成粘土製容器すなわち「土器」の製作を完成させたのである。以下、ロビンソンによる土器創製への過程である：

「仕事としては次のような大変な用事がひかえていた。それは土器 [earthen vessels] のこと

で、私はこれがないためにどれくらい困ったかわからないほどだったが、どうやって手に入れたものかわからなかった。なんとかしてこれを作れないものかとじつは長いあいだ研究していたのである。気候が非常に暑いので、適当な粘土 [clay] さえみつければ、なんとかこれで壺 [pot] みたいなものをでっちあげて、日にあてて乾かせば充分に手でもてるし、また乾いたもの、湿気を嫌うものをいれておけるほど充分固くて丈夫なものができそうなものだ、という気がしていた。私が目標としている穀物や粉その他を用意しておくためにもどうしてもこれが必要であった。私はできるだけ大きくて、それに、ただものを容れるだけでいいのだから壺 [jars] のようにすわりのいいものを作ろうと思った。(中略) 苦心して粘土を探しあて、掘りだし、ほどよく練り、家にもって帰り、ひねくりまわし、二ヵ月もかかって、ようやく土製の大きくてみっともないもの [large earthen ugly things] 二個をこしらえたにすぎなかった。それはとうてい壺などとよべるしろものではなかったのである。さすが太陽にあてた [the sun baked] かいがあって、この二個の容器は固く乾きあがっていた。静かにそっともちあげて、壊れないようにそのためわざわざ作っておいた大きな籠のなかにそれぞれ入れてみた。すると壺 [pot] と籠のあいだに少し隙間ができたので、そこには稲と大麦の藁 [rice and barley straw] をいっぱいつめてみた。こうやっておけばこの二つの壺はいつも乾いているわけだし、乾いた穀物や、やがて穀物が碾けるようになったときにはその粉をいれておくのに都合がよからうと思った。大形の壺をこしらえる計画はもの見事に失敗したが、小形のものも多少成功した。たとえば、丸い小壺 [little round pots], 平皿 [flat dishes], 水差 [pitchers], 土鍋 [pikins], といったもので、これらはいわば手当たりしだいに作ったものであった。小形のせいか太陽に当てると不思議なくらい固く焼けた [the heat of the sun baked them strangely hard] (上巻, pp. 164-165)。

② 土器の獲得

すなわち、日干し粘土製のランプを作ったことを手始めに、様々な土製容器を我が物としたロビンソンではあったが、この未焼成粘土製容器なるものは「しかし、液状のものをいれて、しかも火にかけても大丈夫といった土製の鍋 [earthen pot] が欲しいという私の目的には、どれもこれもそわなかった (上巻, p. 165)」、まだ不十分なものであり、所期の機能は次の段階、すなわち焼成粘土製「土器」の創出ではじめてかなうのであった。それは肉料理の火中で「土器の破片が、まるで石のように固く、しかもタイルのように赤く焼けている [a broken piece of one of my earthen-ware vessels in the fire, burnt as hard as a stone, and red as a tile] (上巻, p. 165)」ことからのひらめきであった。

ロビンソンによる最初の土器焼成作業に関連しては、たとえば火加減のこと、鉛釉、夾雑物(砂粒)の融解ガラス化現象、徐冷に似た工夫に言及するなど、作家デフォーは細かく描述するところがある。おそらくこのことは、作家自身、小説家になる前に一時煉瓦製造に従事した経験があったことがあるいは関連しているであろうと推察される：

「三個の大きな土鍋 [pipkins] と、二、三の壺 [pots] をつみ重ねておいて、そのまわりに薪^{まき}をおき、その下にまっ赤な炭火をおいてみた。外側と上のほうから、盛んに薪をくべてゆくうちに、内においてあった壺がまっ赤に焼けて、しかも少しも割れ目がないのがわかった。それが冴えるような赤さに焼けてから、そのまま五、六時間も熱しつづけた。すると、その一つが割れないかわりにとけはじめた。粘土にまぜておいた砂が猛烈な火熱でとけだしたものらしく、もしそのまま熱しつづけていたら完全にガラスになっていたかもしれなかった。それから少しずつ火勢を弱くしてゆき、そのうちに壺のまっ赤な色もしだいに色褪^あせていったが、あまり急に火勢が減じないようにその晩は徹夜でつきっきり見張りをした。翌朝になると、かっこうこそあまりよくないが三個の立派な土鍋と二個の壺とがまったく申し分なく固くやきあがっていた。そのうちの一つは砂がとけたため見事にうわ葉がかかっていた (上巻, pp. 165-166)」。

こうしてとうとう土器がロビンソンの所有物となった：

「火にかけても大丈夫という土製の鍋 [earthen pot] ができあがったことを知ったときの喜びは、それこそたいしたものであった。鍋がさめるのももどかしく、さっそく一つの鍋をまたすぐ同じ火にかけ、水をいれて肉を煮てみたが、その結果は上上であった。仔山羊の肉でうまいスープをつくったのだが、オートミールなどの材料があれば望みどおりの味がだせたはずだが、ないのは致し方のない話であった (上巻, p. 166)」。

彼はきつと大きな音をたて、心ゆくまでスープを啜ったことであろう。漂着後三年が経過していた。なお、土器作りに関するその後の進展のひとつには轆轤^{ろくろ}使用があげられる：「土器作りのほうもわれながら意外なほど上手になった。これには轆轤 [wheel] を使う工夫をうまく考えだしたのだが、これでやると、前には見るからに不恰好だったものがこんどはいかにも丸くていい恰好にできあがった。どのくらいこのために楽々と、また手ぎわよく仕事ができかわからないくらいだ (上巻, p. 196)」。この時期は明記がないものの、物語の前後関係から、焼成土器をついに完成させたのち少なくともさらに3年以上は経過していたと判読される。

③ 西アジアと「絶望の島」

土器創出は、その時期あるいは目的において、前にも記したように、穀物栽培との関連のうえで注意を要する。ロビンソンは漂着して半年ほど経過したころ、全くの偶然から、オオムギとコメを手に入れることとなる。すなわち「ごみくずみたいなもの (上巻, p. 108)」として、その入れ物の小袋から捨てられた家禽用飼料の穀物が育ったのである。この時のオオムギの穂20本が、数年後には1エーカー (約40アール) 以上の土地に蒔くほどの量に増えたのである。もちろん、この間の諸事が楽々と進展したわけではない。鋤、鍬、シャベルを作ることから始めなければならない土地の

開墾、播種時期の失敗、害獣・害鳥対策の必要等々。収穫が済んでも粉をひくための臼や、ふるい
わけるための篩や、パンにするためのパン種や塩や、また焼くための竈の必要等々、数限りない難
題を克服せねばならなかった。そしてついには「どうしてもこれが必要」で、かねがね「これがな
いためにどれくらい困ったかわからないほどだった」というものがいよいよ不可欠の事態となっ
たが、これこそ「土器」であったという物語の進展であったことは既述の通りである。ここに、西ア
ジアにおける土器発生に呼応するところがあると考えられるのである。すなわち、穀物栽培に関わ
る必需品として土器が作られるようになったとする物語の展開は、焼成粘土製容器の出現以前に、
未焼成粘土製の容器が活用されていたこともふくめて、西アジアの古代遺跡調査が明らかにしてき
た成果—土器は「無土器新石器時代」という段階を経て、農耕・牧畜がかなりの程度発達したとき
にはじめて生み出された—と、処々相共通するのである。もっとも、それでは一体なにを直接的契
機に土器は生れたかということになると、かつてイスラエルの考古学者アミランは、パン作りの過
程（生地を捏ね、成形し、焼成する）との共通性に西アジアにおける土器発生の基を想定したが
(Amiran 1969)、ロビンソンがその日記（1959年9月30日付）中に呼ぶ「絶望の島 [the Island of
Despair]（上巻, p. 98）」では、記述から読み取るかぎり、順序は異なる。（パンは難破船から入手
したものをロビンソンはすでにいくらか所持しており、節約しつつ食していた。）

ところで、物語舞台「絶望の島」の自然環境は西アジアの、少なくとも「豊穡なる三日月地帯
（前出）」のそれとよく似ている。いずれも「太陽が真上にあるまっ昼間はやけるような暑さ（上
巻, p. 157）」（秋分日の「天測によれば「絶望の島」は北緯九度二十二分（上巻, p. 90）」）で、「一
年の季節がヨーロッパのように夏と冬というふうではなく、雨季と乾燥季というふうにだいたい分
けられる（上巻, p. 146）」気象環境であった。そしてココア、ブドウ、メロン、オレンジ、レモン、
シトロンなど、貯蔵もきく果物が豊かに実り、「肉や乳やバターやチーズの生きた倉庫をかかえて
いるような（上巻, p. 208）」家畜化しやすい動物（山羊）の棲息する自然環境でもあり、採集して
食料にする亀や野鳥や魚も多く、そこは「飢えにせまられないどころか、おいしいものにふんだん
に恵まれていた（上巻, p. 151）」。安全面の点でも「警戒しなければならぬ動物もべつにいそ
うなものないし、（中略）動物のうちで一番おおきなものも、山羊くらいなものであった（上巻, p. 142）」。
すなわち、ロビンソンにとっては不幸中ながら、「絶望の島」の幸いなる自然環境はきつと「豊穡
の地」と呼んで良いものであったにちがいない。

なお、ムギ、コメの栽培の場合と異なり、「絶望の島」で牧畜が本格化したのは、ロビンソン漂
着後11年目からであったので（上巻, とくに pp. 197-201）、類似するところ大の環境下ながら、土
器発生との関係からは、これもパンの場合同様、西アジア考古学から見られる史実とは順序が異な
る。

むすびにかえて

いくつかの類似点を並列して互いの相似性を強調することは慎むべき考察法であるが、17世紀末

から18世紀初めの一作家の記述が、西アジア考古学の調査研究成果とうまく相応するところが多々あることにどうしても不可思議さを覚えざるを得ない。あたりまえながら、デフォーが西アジアの初期農耕村邑遺跡に関する考古学的知識を持ち合わせていたはずはない。ただ彼は、スコットランドの船乗りアレクサンダー・セルカーク (Alexander Selkirk, 1676~1721年) なる人物が、ある事情から南米チリ沖合のファン・フェルナンデス諸島に置き去りにされ、4年4ヶ月間この無人島に独居したのち帰還した、という奇跡的出来事に関心を抱いていたといわれている。『絶世奇談』は文学としてのみの関心にとどまらず、経済史学においても考察材料になってきたが(たとえば大塚1966, とくに第Ⅱ章「経済人口ビンソン・クルーソウ」), 考古学的にも「奇しくも驚くべき冒険」譚として再考の余地はじゅうぶんにあると思われる。

【参 考 文 献】

- 大津 忠彦・常木 晃・西秋 良宏, 1997, 『西アジアの考古学』, 同成社。
- 大塚 久雄, 1966, 『社会科学の方法』, 岩波書店。
- ねず まさし訳, 1951, G. チャイルド著『文明の起源(上)』, 岩波書店。
- Amiran, Ruth, 1969, *Ancient Pottery of the Holy Land*, Jerusalem.
- Braidwood, Robert, 1958, Near Eastern Prehistory - The swing from food- collecting cultures to village-farming communities is still imperfectly understood. -, *Science*, vol.127, no. 3312, Washington, D. C.
- ibid., 1961, The Iranian Prehistoric Project, 1959-1960, *Iranica Antiqua*, vol.1, Gent.
- ibid., 1968, First Steps towards a Food- producing Way of Life in Late Prehistoric Iran, *Archaeologia Viva*, no. 1, Paris.
- Braidwood, Robert; Howe, Bruce; Reed, Charles, 1961, The Iranian Prehistoric Project - New problems arise as more is learned of the first attempts at food production and settled village life. -, *Science*, vol.133, no. 3469.
- Childe, Gordon, 1927, *The Dawn of European Civilization*, London.
- Ghirshman, Roman, 1938, 39, *Fouilles de Sialk près de Kashan*, vols. 1, 2. Pari.
- Lloyd, Seton, 1963, *Mounds of the Near East*, Edinburgh.
- Rosen, Arlene, 1986, *Cities of Clay: the Geoarcheology on Tells*, Chicago.
- Smith, Philip, 1971, Iran, 9000-4000 B.C.: the Neolithic, *Expedition*, Vol.13, no. 3-4.